むかつくぜ！

室井滋

紹介

滋（むろい・しげる）

県出身。早稲田大学社会科学部在学中に映画や学生演劇を始め、以後中退して、たくプロの女優になる。長所、女性にしては、ずば抜けた体力の持ち主。短所、女性にしては、底抜けの胃袋の持ち主。現在、一級小型船舶操縦士の免許を取得中。

むかつくぜ！

著　者　室井　滋

発行者　安田富男

発行日　一九九一年　六　月二七日　第　一　刷

一九九二年　六　月　二　日　第二五刷

発行所　株式会社マガジンハウス

〒一〇四―〇三　東京都中央区銀座三―一三―一〇

電話　書籍販売部　〇三（三五四五）七一三〇

書籍編集部　〇三（三五四五）七〇三〇

印　刷　三松堂印刷株式会社

製　本　株式会社積信堂

© by Shigeru Muroi 1992, Printed in Japan

落丁本、乱丁本は小社書籍販売部宛にお送り下さい。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

ISBN4-8387-0163-2　C0095

定価はカバーと帯に表示してあります。

目次

果てしない戦い　6
友達の貸し　11
恐怖便所　18
フィリピンの王様　23
ひとり暮らしのああ無情　29
続・ひとり暮らしのああ無情　34
別れる理由　39
安全パイ　43
自由恋愛　47
キス　51

東海道線最終便屈辱事件 55
「泣きゃー世の中渡れると思っとる！」 61
沈黙は金 65
K君の三人の恋人 69
ザ・富山 73
どっちが毒!? 77
女の身だしなみ 83
趣味 89
占い嫌い 93
「女優」の名前で出ています 98
乗り遅れた夜 104
ロック・ロック・ロック?? 111
ゴミ 116
私は魔女 121

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ケツの穴 130
恥とおばさん 137
アタシ悩んでます 143
私って温泉好きなのに……148
K子の相談 153
私のXDAY（エックス） 159
プライバシー？ 164
オクラホマミキサー 172
ある中古マンションの話 177
腐っても鯛 183
隣りの女 189
父の教え 194
ごはん物語 200
あとがき 204

装丁――日比野克彦・坂川栄治
絵――日比野克彦

むかつくぜ！

果てしない戦い

私は昨年の秋に、現在の住まいに引越して来たのだが、新しいマンションに来て、とても便利になったことが一つだけあった。

それは、車の駐車場だ。

以前は、駐車場まで五分も歩かなければならず、しかも青空駐車をしていたのだ。

この五分というのが意外に面倒で、五分歩いて埃まみれのマイカーに乗るか、タクシーに乗るかでは、私はいつも迷わず、タクシーを選択したものだった。

今はマンションの1F部分が車庫になっており、リモコンシャッターまでついている。

これで、タクシーに乗る回数もグッと減り、バンバン車に乗れるぞと、最初のうちはとても喜んでいたのだ。

ところが、ところが、ここにも一つ問題があった。

この新しいマンションというのが、青梅街道ぞいから一本入った所にあるのだが、青梅街道と家を結ぶ一本道がとても狭い上に、車が片側に何台も路上駐車してある。

おまけに、一方通行じゃないので、車を出す途中、路の真ん中で対向車に出くわしてしまうと、どちらかがバックでいったんさがらなければ通ることが出来なかった。

路上駐車の車がベンツやジープなんかの時には、まったくお手上げで、できるなら通りたくないのだ。私の家から出るのには、もう一本、道があったが、そこは一方通行なので帰るにはこれしか道がなかった。

夜帰って来ても、青空駐車で家に入れないということが何度も起こり、そんな時はバックで青梅街道に戻り、街道ぞいに車を一時停めて、道があくのを待ってからやっと車庫に入ったりしていた。

腹が立つのは、その際、街道の自分の車に駐禁シールをベタッとはられてしまうことだ。輪っかまで付けられそうになった時には、あわてて、放置された車のそばの家を、一軒一軒〝お宅の車ですか〟と尋ねてまわったりもした。

だが、結局、私にとって、ものすごい時間のロスと消耗にしかならないので、私は再びタクシー派に戻りかけた。

が、それでもせっかく引越して来て、しかも目の前に毎日車があるので、どうにもくやしくて腹の虫がおさまらなかった。

まあ、こんな訳で、私は次第に路上駐車の車をとても敵対し、すごく過敏になっていった。そして、まさに路上駐車しようとする車を見つけようものなら、素っ飛んで行って注意したり、常習犯の車の前で運転者を待ちぶせして、怒鳴ったりするようになった。

そして、先日のことだ。

私は駅に向かって、例の一本道を歩いていた。いつもながら、路上駐車の車がズラリ並んでいた。思わず蹴ってやりたくなる程むかつき、「バカヤロー」と吐き捨て、青梅街道に出た時だ。婦警がピッピッと笛をふき、レッカー車を誘導しているのを目撃してしまった。私がここで一気にどんな気持ちになったか、もう説明せずともおわかりだろうと思う。

(以下、その会話)

私「すみません。私、この路の奥の方に住んでいる者なんですけど。ほら、こんな風に車が止まっているとね、自分の車庫に車で帰れなくなっちゃうんですよ。ついでに、これらの車全部、レッカーしちゃってくださいますか」

婦「はあ、今、それでお困りなんですね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

私「いえ、今っていうよりも、いつもなんですよ」
婦「あのー、基本的にレッカー移動を希望される時は、まず110番してください」
私「あのねえ、あなた婦警さんでしょ。警察の人がこうして目の前にいて、直接住民が困ってるっつってんだから、それでいいじゃないの。さっさとやって、レッカー」
婦「はあ、どうもあなたのお話が分りませんねぇ。で、今、あなたの車は何処なんですか」
私「えっ、私の車は、今うちの車庫だけど」
婦「じゃあ、何も問題ありませんね」
私「だからさぁ、そんなこと言ってんじゃなくて、広い道のレッカーもいいけど、ここは広いからまだ通れないってことないでしょ、その路はまったく通れなくなるんだから、ついでにレッカーやってくれって言ってんでしょうが」
婦「ですから、実際に困った時に110番を……」
私「分った。じゃあ今から、私さぁ、出掛けることにするわよ。するとまあ、すぐに困るんだけど、したらあんたレッカーしてくれるんでしょ。……ほら、今、困ってんのよ」
婦「そうですね。まず、あなたが110番されて私が連絡を受けるようなことになれば、後々そうなるかもしれないですねぇ」

それじゃあ白亜のマンションからあんた「キャーッ」ていう悲鳴が聞こえても、まず誰かが110番しなきゃ、助けに行かねぇつもりなんだね、と私は思わず口から出かかったが、さすがにそれだけはグッと堪えて、「分りました、110番しましょ」

と、この馬鹿馬鹿しい会話からおりた。

そして、その日の夜のことだ。

私の乗ったタクシーが、見事にこの路を通れず、私は途中で降ろされてしまった。私は思わず「やったぁ！」と叫び、自分の部屋に駆け込んで、生まれて初めて110番に電話した。

電話に出た人は、さっきの婦警とはくらべものにならないほど、手際のいい応対ではあったが、結局のところ、今現在お部屋に入られたのだから、別に文句ないでしょうということになり、私は再び辛酸をなめたのだった。

昔、自分の畑を近所の猫たちに荒らされたおじいさんが、怒って、自分の敷地に入って来た猫の足を次々にチョン切ってしまい、動物保護団体から抗議を受けているというニュースを見たことがあるのだが、何と言うか、今の私には、このおじいさんの気持ちがはなはだしく分るような気がする。

友達の貸し

ここのところ、また一段と寒さが増してきて、巷ではモウレツな風邪がはやっている。割と健康には自信ものの私の体なのだが、さすがに少々ばてぎみだ。

こんな時は、熱い風呂に入って、ホットカルピスなぞ飲んで寝るのが一番と思い、早く帰った。すると、蒲団に入るやいなや、枕元で電話が鳴った。

「オッスー、元気、寒いねぇ」

「何よ!?」

「何よって何よ。いきなりそりゃあないでしょ」

「だって私、風邪ぎみで、今寝るとこだったんだもん」

「本当。私も少し前までひいてたけど、もう治ったよ。大丈夫横になってりゃあよくなるって。それより私の話、聞いて」

元気バリバリのK子が自慢げに、こんなことを言った。

「私さ、一昨日から友達とスキーに行ってたんだけど、さっき帰って来たのよ。途中もものすごい渋滞でさあ、ほら、今日、日曜でしょ。皆、帰って来るんだよね、スキー客が。トイレもだんだん危なくなってくるし、ノドもカラカラだし、体はヘトヘト、頭はトロンでさあ。とにかく、けっこうきつかった訳よ。でも、まったく動かなくて、私もかなりカリカリきてたんだけど、そんな時、後の方から、ピーポー、ピーポー、ピーって音が聞こえてきて……」

「救急車!?」

「そう。救急車が来たのよ。『前の車、道を開けてください』って拡声器でがなりたてながら」

「へーえ」

「で、どうしたと思う」

「さあ??」

「救急車通した後、すぐにそのあとにひっついてやったのよ」

「え!」

「救急車の後にピシッとくっついて金魚のフンみたいになってド渋滞の道をくぐり抜けたってわけよ」

「うっそー」

「気分良かったわよ。映画の『十戒』みたいに道が左右にパーッとひらくのよ」

「あんた、叱られなかった!?」

「モチ。叱られた、叱られた。拡声器で『後ろの車、止まりなさい』って何度も言われたけど、向こうだって急いでいるから、私ばかりに構っちゃいられないわよね。なんてったって人命第一の救急車だもんね」

「あきれた。あんた、よくそんな事して平気でいられるよね」

「あら、だって私、救急車には『貸し』があるのよ。このくらいして下トントン」

「何よ『貸し』って」

高飛車なK子の話に私は唖然として、その理由を尋ねた。

K子の「貸し」とは次のような話だった。

何年か前の正月のことだった。

正月の一日か二日、帰省ラッシュをさけて、K子は田舎に帰るつもりにしていた。

ところが除夜の鐘が鳴り出した頃から、頭痛がしだして、体中の骨がまるでバラバラになるみたいなシビレを感じはじめた。

少々の風邪なら、多少無理してでも実家に帰って治そうとK子は思ったのだが、ところがどうにもこうにも立ち上がれない。

仕方なくK子は薬を飲んでしばし横になっていた。

百八つの鐘も鳴りおわり、いよいよ年が明け、元日の朝を迎え、さらに夜になり、二日の昼過ぎになったが、K子の頭痛はおさまるどころか、なおいっそう、ひどくなってきた。おまけに、飲まず食わずで横になっているから、体の力もだいぶん尽きてきた。

さすがのK子も「このままじゃいけない！」と、体の力をふりしぼって、ついに119番したのだった。

そして電話の向こうの見知らぬ人に、彼女は、風邪でダウンしたのだが、正月で医者がどこも休みなので自分の家の近くで開いている医者を教えて欲しい、とだけ言った。

「苦しい、助けて、お願い救急車！」とは、断じて言わなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com